



2018年5月25日、ローマにて

シスターたち、聖心の家族の皆様へ

聖マグダレナ・ソフィアの祝日、そして聖心会のカリスマの核心を祝い、修道者としての命とミッションに対する奉獻を新たにする聖心の祝日に向けて、愛と祈りと心からの挨拶と共に、この手紙をお送りします。

この数か月間、特に四旬節に入ってから、総顧問会の一同と私は、皆さんへの聖心の祝日のメッセージについて考え、祈り続けてまいりました。この事は、私たちの祈りと観想の多くがそうであるように、訪問先のヨーロッパ各地の共同体の日々の暮らしを経験しつつ、カリスマ、ミッションと2016年総会の求めに沿って福音を生きる努力をする中で、行われました。

国際的な修道会における一年半に及ぶ奉仕の務めを通して私たち五人は、会の有りようを異なった様々な場所で体験し、恵みと同時に乗り越えなければならない課題や困難を与えられていることを認識しています。全体を見渡すことのできる恵まれた立場にあることも知りました。聖心会シスターたちと聖心の家族のメンバーと共に、喪失の悲しみも、新しい命への願望と大きな喜びも体験しています。ベネズエラ、コンゴやインドなどの、私たちにとっての身内や友人たちが迫害や死に直面している土地では、「私たちの小さな会」が一緒に暮らし奉仕する人々の苦しみの大きさは打ちのめされるほどのものかもしれません。しかしそれと同時に、スペインのアルメリア、シチリアのアグリジェントや、困難に満ちた状況にありながら新しい生活を求め探す移民と共に過ごすアメリカとメキシコの国境沿いなどでは、新しい命にも出会います。私たちとカリスマや霊性を分かち合い、学校などの教育の場で指導者となり、私たちのミッションを力強くはっきりと担う男女にも新しい命を見ることができます。小さくなっていく管区の人々と共に過ごす時、愛するシスターたちの悲しい死は、私たち自身の死の必然性を思い起こさせてくれます。病や老齢のためシスターが支えを必要とする時、介護の手を差し伸べる信徒の存在を神に感謝し、新しく生まれる管区や、少人数のRSCJが信徒の仲間たちと正義、平和、創造世界の保全を支持し主導権を発揮し、私たちの命とミッションを活性化する時、そこにも新しい命の印を見ることができるのです。

溢れるほどの物質の豊かさと死にも至る貧困に目の回る中で、国家の指導者や人々の間には和解や平和よりもむしろ対立が生まれる世界では、修道会として私たちは、会の歴史上もっとも重要な局面に差し掛かっています。今、私たち一人ひとりには生と死の神秘に踏み入り、ミッションを守るという大なる目的のために、一つの体として「命」を選択することを求められているのです。これは決して新しい道程ではなく、

既に 2016 年の聖心会総会が権限を持って発した呼びかけや勧告によって明確化され、結晶化され、活力を吹き込まれました。

私には、この道程にとって不可欠な事柄が三点あるように思われます。それは聖霊に耳を傾ける能力を高めること、他者との対話に自らを開放すること、そして新しい生き方を始める事への妨げとなるつまらない関心事、身構え、人生の選択などを手放すことの三点です。

皆さんへのメッセージについて考え祈っていた時、私たち聖心会の修道者と成長を続ける 21 世紀の聖心の家族について、福音の中の三つの出来事がしきりに私に語りかけました。私自身の簡単な省察を喜んで分かち合いますので、ソフィの祝日から聖心の祝日までの間に少し時間を取り、省察に照らしてご自分の人生について再検討することをお勧めします。私たちは聖心の祝日に、聖心会の中にあつて永遠にイエス・キリストに従い、未来の創造に関わる一人となり、「命」を選択することを約束し、会に対する誓願を新たにします。また、聖心の家族の皆さんへは、信徒として会の霊性とミッションを共に生きる事への再度の献身を呼び掛けます。

省察の第一点目は、私たちが皆よく知っているソフィの祝日の福音です。イエスは私たちに、自分がブドウの木、命の源であり、私たちが枝であることを思い起こさせます。何時ものようにヨハネの福音は私たちの生活の中における神の働きについて、洞察を加えます。素人庭師の私には、ブドウの剪定はいつも難しく、枝を切り落としたり、密生しすぎているものを引き抜くことが正しいと信じることができません、けれど最高の果実を作るという目的に到達するためには、剪定は絶対にしなければならないのです。ブドウの剪定は一つの芸術で、成長期を避けて行うのがコツです。農園主は、新しい枝に栄養を回すためにどの枝を刈り込むかを見極めなければなりません。手入れのされているブドウ畑とそうでない畑の違いを見るだけで、命の栄える場所がどこかは一目瞭然です。それぞれのブドウにとってよい時期に、必ずしも同じ方法を取るのではなく古いブドウ、新しいブドウ、時期や場所を選んで剪定を行います。原則はいつも同じ、元気な植物と最も香り豊かな果実を育てることが目的なのです。

今私たちが置かれているのはまさにこのような場で、個人として、同時に共同体として求められているのは、聖霊に耳を傾け、どの部分を剪定しどの部分を新しい命のために育てるかを識別することと私は信じます。ここで大事なことは、この畑の所有者が我々でないということで、この事を忘れてはならないでしょう。キリストこそが所有者です！地元でも、地球上のどこでも、仲間の経験が私たちを動かす力となり、彼らが私たちにとっての太陽であり土壌です。私たちは耳をすまし注意を払わなければならない働き手なのです。もう一つ覚えておく必要があるのは、このブドウ畑の働き手は私たちだけではないということです。協力し合えば実りはより豊かになるでしょう。

国際的な会として、私たちはこれから共同体としての識別へ移ろうとしています。今この時を、開かれた精神、広い心、偏見に囚われない意志と、現実を見据え、未来を夢見る勇気をもって臨むようにと招かれるでしょう。祈りと不偏心、手放す態度が識別に入る前提となります。2016 年総会の核心となった二つの問いかけ一神は私たちがどうあることを望んでおられるのか、神は私たちに何をすることを求めておられるのかは引き続き私たちに投げかけられています。ソフィの祝日には勇気と信頼を求めて一緒に祈りましょう。

省察の第二点目は、復活祭の朗読ヨハネ 20 でマグダラのマリアが早朝イエスの墓を、悲しみと期待の双方を胸に訪れるところです。イエスの墓が空であることを確認した時のマリアの衝撃を想像してみてください。マリアは失ったものために泣きましたが、その場から逃げたり、悲しみのあまりボロボロになったりしませんでした。それよりも彼女は墓の体験へと入り、自分自身、天使、イエスとの対話を通して、新しいことを発見したのです。甦られた主との優しい愛に満ちた出会いの中で、主を見分けるという恵みと慰めを得ました。空の墓の体験と、甦られた主との個人的な出会いは、マリアに希望と、自分の限界を超えてイエス・キリストの呼びかけに応えて、自分の体験したことを広く公表する可能性をもたらしたのです。

私たちは今、聖土曜日の時を生きているところです。文筆家の中には、この時をリミナル空間—すでに知られている時とまだ知られていない時の間—と呼ぶ人もいます。いろいろな意味で 2016 年の総会は、今まであったこととこれからあるであろうこととの間のこの空間へ、私たちを招き入れたと言えるでしょう。神の存在と呼びかけに対する確信を失うことなく、総会において私たちは「古い秩序の終焉」を認識しました。その場から逃げたり、絶望に打ちひしがれたりするのではなく、私たちにとっての福音の時に、キリストと共に新しい創造に創造者の一人として参加することに呼ばれているのです。それは私たちのミッションとカリスマを新しい方法で広く訴える新しい時でもあるのです。

共同体としての識別、特に「一つの体作り」(Build One Body)を志す私たちの会の共同体内で対話の果たす役割について、最近私は考え続けています。以前にも増して、私たちがとても多様な女性の集団であることを強く意識するようになりました。それは単に私たちが 41 を超える国や文化から集まり、異なる言語を話すからだけでなく、私たちが世界や命を、異なった視点に立って見るからでもあるのです。相手と話し合い、分かち合い、対話をすることはたやすいことではありません。もし私たちが本当に識別を共にすること、一つの体作りや一つの心(Cor Unum)を生きることが望むなら、お互いに必ずしも同意見でない問題や状況についても話し合う力を養うことが必要です。互いの経験に踏み入り、敬意をもって意見に耳を傾け、愛をもって賛成不賛成を伝えるすべを身につけなければ、礼儀正しい人生を送ることはできても、識別を共に行うことの最も重要な部分を逃してしまうでしょう。

最後は、私たちの祝日の福音についての省察です。毎年、聖心の祝日の福音を私は楽しみにしています。なぜならその言葉には、必ず私の、私たちの人生への示唆が含まれているからです。今年は、十字架のイエスの経験に踏み込みます。使徒たちと、イエスの家族は絶望していたでしょう—彼らの望みは断たれ、全ては終わってしまいました。彼らの想像の中の王国は実現しませんでした。聖母マリアとイエスを囲む女性たち、そして使徒たちも、死の深く重い経験に囚われ、死を乗り越えることや復活の話は全て忘れ果てていたのでしょう。イエスの旅の第一部は終わりました。使徒たちはエマウスへの道で互いに「私たちは望みをかけていたのに」と言いました。けれどそこに、これから来るものの微かな前触れがありました—イエスの脇腹から流れる血と水、彼の体に人類が残した傷痕と彼の経験した死の中に、新しい命があったのです。

ある意味で私たちは十字架の側にたたずんだイエスの弟子たちによく似ているのかもしれない。喪失、苦悩や死に戸惑い、途方に暮れ、新しい命の出現を見落としてし

まうのです。私たち自身の人生の経験から、深く悲しむ事が不可欠であることを知っています。同時に、大きな喪失や苦悩の痛みは、ある時点から私たちに新しい命を探し求めるように仕向けることも知っているのです。聖心会の修道者として、イエスの開かれた脇腹の神秘に入り、キリストの苦悩と人類の苦悩に踏み入れるように呼ばれ、その苦悩のあまりの深さが私たちをすっかり根本から変えて希望の女性へと変容させるのです。聖体拝領の命の食卓を囲み、イエスの開かれた脇腹の神秘に入りイエスの死と復活を記念する時、その心は人類家族の苦悩と希望であると、私たちの会憲は思い起こさせます（会憲5）。私たちが探し求める新しい命とは何か、それを見極めることの邪魔をするものは何か、私たちの共同体がキリストの復活を記念して、新しく始めたいこと何か、これらのことを私たちは自分に問いかけなければなりません。

ソフィの祝日に彼女と祈り、聖心の祝日に誓願を更新する時、皆さんとのこの旅路において一人ひとりが役割を持っていることを、どうか理解して下さい。私たちは全員深く祈ることを求められています。お互いのために、世界とその人々のために、キリストの聖心のうちに愛を深めることを求められています。私たちが可能な事なら、どのような事にも参加することを求められています。私たちが未来の創造者の一人となるために、若すぎることも歳を取りすぎていることもありません。私たち一人ひとりには、捨てることのできない、他の誰かが取って代ることもできない、どこにいても心と人生の真実の中で、聖マグダレナ・ソフィアのカリスマを生きるという、基本的な責任があることを忘れないでください。（会憲 140）

ソフィにとって生涯の導き手となった聖霊が、私たちにも力を与え、行く手を照らされますように。世界の、教会の、そして会の命のためにこの上なく重要なこの時に、私たちがより深く一致して生きるために必要な恵みを聖霊に願って、共に祈ることができますように。

愛と祈りを込めて、

*Barbara mj.*

Barbara Dawson RSCJ

（訳：中山洋子）